

論文要旨

惟明親王歌の研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D174886

氏名：北原 沙友里

本論文は、後鳥羽院の異母兄であり、藤原定家や藤原家隆、式子内親王など、新古今時代に名を残した歌人らと交流の痕跡がありながらも、これまであまり顧みられてこなかった惟明親王を取り上げ、その和歌の考察を行ったものである。以下各章の要旨を述べる。

第 I 部では、現存している惟明親王の二つの百首歌のうち、『正治初度百首』について各部立の構成や表現に関する考察を行った。

第一章では四季部の歌について論じた。

第一節では春の歌 20 首を取り上げた。春部では、同一あるいは類似する歌材や表現の歌が並び、部立全体としての統一が図られていたが、この部立で特に注目すべきは、桜の香を詠んだ歌を連続して置くという配列だった。桜の香を詠むということ自体があまり例を見ないことであったが、新古今時代には少ないながらも用例が見出せた。その中でも惟明親王は、風に薫る桜の香を詠むという『金葉和歌集』や『千載和歌集』という少し前の時代の趣向を取り入れることで、衣への移り香を詠む同時代の趣向とは差別化を図っていたといえる。

第二節では秋の歌 20 首を考察した。秋の部立でもやはり同一の歌材や類似の表現の歌が全体として配列される傾向にあったが、その中に構成上違和感を覚える歌がいくつかあり、特に 154 番の歌を取り上げ考察した。この歌は、『林葉集』の歌とほぼ同一の歌となっており、一見すると先行歌を無造作に取り込んだかのように思える一首である。しかし、この歌に詠み込まれている「おきみの里」という珍しい歌枕によって月への連想を働かせることが可能となり、一首の情景に月の光を添えると共に、直前の月歌群との接続が図られていると捉え直すことができることを示した。

第三節では夏と冬の歌各 15 首を取り上げて分析した。

夏部では配列上目を引く部立冒頭に置かれた首夏の歌について考察を行い、夏部冒頭の 124 番歌では「花の袂」という表現から直前の春部との繋がりを意識したと思われる歌であること、この表現から『堀河百首』や『重之百首』の歌へ結びつけることができ、惟明親王の百首歌への意識が現れた歌であることを述べた。続く 125 番歌は、直前の 124 番歌の「いとふ」という強い表現を補う形で、祝意性の強いものが置かれているのではないかと考えた。

冬部では特に 172 番歌を取り上げて考察した。この歌は網代と氷魚を取り合わせて詠んだ一見ありふれた歌であるが、「とまらぬひを」という詞続きにすることで、詞の上で歳暮の意を響かせた歌であることを指摘した。そのような解釈を可能にする要素の一つとして、この歌が冬部の 14 番目に置かれていること、惟明親王は春から秋まで部立末には二首、各季節の暮れを詠んだ歌を置いていることが挙げられる。

第二章では恋部 10 首の考察を行った。恋部では、1～5 首目が恋愛成就以前を、6～10 首目が恋愛成就以後を詠んだ歌となっており、時間的推移に配列するという恋部の基本的な枠組みを親王も踏襲していたと言える。さらに細かく分けると、ひたすらに逢うまでの苦し

みを詠った不逢恋を詠んだ歌群（1～5 首目）、待恋を詠んだ歌群（6・7 首目）、共寝を主題とした逢不逢恋の歌群（8～10 首目）と三つのまとまりに分けることができる。さらに待恋を詠んだ中盤では同時代に取り合わされていた表現を配列という観点から利用していることを明らかにした。また、三つの歌群は詞や表現で有機的に結びついていた。不逢恋から待恋へは〈あふ〉という言葉や「枕の塵」という表現で詞続きや題における連続性が見出せ、待恋から共寝へは、衣や床に関連する表現によってやはり結び付けられている。

第三章では雑歌 20 首について、羈旅・山家・鳥・祝の部立毎に考察した。

第一節では羈旅の 5 首を取り上げた。羈旅部では涙や露、衣など類似表現を多用しており、四季や恋にも見られた同一の歌材を用いる傾向が顕著であった。さらに、これらの歌は、一般的な題詠の羈旅歌に顕著である、典拠作品のイメージを借りた歌や歌枕・名所を詠んだ歌が含まれておらず、ひたすらに旅の辛苦のみを詠んだ歌が並んでいる。表現と主題が似通った構成は、ややもすれば全体の情景が変化に乏しいものとなっているが、先行歌にはない表現や、先行歌を踏まえた新しい表現を取り入れており、全体的には新奇の表現の取り入れに成功していると言える。

第二節で取り上げた山家五首は、これまでの部立とは異なり、同一あるいは類似の語句や表現の多用は見られず、歌材の偏りが無いという点では後述する祝題に通じる。この部立では聴覚表現の歌と視覚表現の歌を交互に置く配列となっており、このような配列は後述の鳥題の配列にも通ずるところである。また、深草の里や猿の歌など、一見凡作に見える中にも新しい詠み方を探求する姿勢は、秋や羈旅の歌にも見られた、惟明親王歌の特色の一つであると言えよう。

第三節では鳥題五首を取り上げた。5 首全体としては晩秋から冬のイメージが喚起される歌が並び、さらに聴覚表現の歌（1 首目・4 首目）、視覚表現の歌（2 首目・5 首目）と 3 首目を境に同様の配列になっていることも指摘した。境となっている 3 首目は、「山鳥」の歌であり、この歌は鳥が鏡を見て鳴くという視覚・聴覚両方に拠った歌となっており、この歌が中央に据えられていることも意図的なものを思わせる。

また、鳥の題自体が『正治初度百首』独自の珍しいものであるが、惟明親王はその珍しい題の中でさらに新しい歌を詠もうと試みていたようである。「てりましこ」という新しい歌材で見立ての歌を詠んだり、番の鴨を沓に見立てるといった斬新な発想で詠んだりしている。山鳥というありふれた歌材も従来の詠まれ方とは異なる詠み方となっている。

第四節では祝題の 5 首を分析した。まず全体的に視覚的な歌が配列されていること、また 200 番歌以外は先行歌の表現や歌材を踏まえた歌であることを指摘し、200 番歌について特に考察を行った。

当該歌は、星により祝意性を持たせているが、慣用表現を駆使し星座の定まっている様子に治世を重ね合わせる同時代の一般的な星の賀歌とは異なり、慣用表現を用いず、祝意を表す手段として星の数を利用している点で新しい歌であることを明らかにした。さらに、星の数を詠んでいるという点から漢詩文に見える「衆星」表現からの影響が読み取れるのではな

いかということを指摘し、単に後鳥羽院の治世の永久性のみを星の数に仮託しているのではなく、院を中心として人臣が集まる様をも詠み込んだ祝の歌だと解釈できることを述べた。このように星の数に焦点を当てた詠み方は、後代の星を詠んだ例にも見られるようになり、当該歌の影響の強さを感じさせる。とはいえ、後代の例も星の慣用表現から抜け出せておらず、その点でも当該歌が際立っている。

第二部では、これまで和歌そのものの考察がなされたことが管見の限りない、惟明親王の『千五百番歌合』の百首歌を対象に、惟明親王がどのように歌を詠作しているのか、またその歌が同時代にどう評価されているのかを論じた。

第四章では、先行研究で典拠歌の言及がある 35 首を対象とし、親王がどのように先行歌を撰取しているのかを検討した。

第一節では古歌を直接撰取している歌を考察し、これらの歌では元の歌の詞続きや内容をほとんどそのまま取り入れている例が多数見られる一方で、典拠元の表現や内容を詠み替えている例もわずかながらあった。そのレベルは詞や表現から主題に至るまで多岐に渡り、惟明親王が新古今時代の特徴の一つである本歌取りという手法に対して試行錯誤を重ねていた姿勢が読み取れた。

第二節と第三節では同時代や近時代の歌を踏まえて詠作したと思われる歌を考察した。第二節で取り上げた歌は、語句や表現レベルの撰取に留まるものだったが、第三節で取り上げた数首は同時代の先行歌を踏まえなければ、解釈が難しいものであり、惟明親王にとって同時代の歌も言わば本歌となりうる対象だった可能性を指摘した。

第五章では、春と恋の歌で勝判定を受けている 9 首について、判詞に注視しながらどのような点が評価されているのかを論じた。春歌では先行歌を踏まえつつ他に例を見ない詞や表現を用いた歌に勝が付けられていること、恋歌では逆に一首としてまとまっているものや本歌取りの歌に勝が付けられていることが明らかになった。この結果は、『正治初度百首』において惟明親王が垣間見せていた、新奇な表現への関心や開拓心が、当時一定の評価を得ていたことの証左でもあるだろう。

終章では、これまでの考察を踏まえ、惟明親王歌の特徴と傾向をまとめた。

百首歌全体としては、惟明親王は基本的に歌材や語句、情景によって隣り合う歌同士を結びつける手法を多用しており、そこに一定の配列意識がうかがえる。また、一見構成からは浮いてしまっている歌でもその表現を丁寧に見ていくと前後歌とのつながりが見出せた秋や冬部の例や、直前の部立を意識した歌が冒頭に置かれていた夏部の例から、表現と構成が密接に関わっていることやその構成意識が部立内に留まるものではないということを明らかにした。加えて、恋部のように同じ言葉や類似表現の多用は部立て内の歌群を連結させる役割を担うこともある。雑部では配列に共通する傾向はなかったものの、歌材や詠み方という点では従来の詠み方や同時代の傾向とは趣を異にする歌が目立ち、新しい表現を模索しようとする親王の意欲を読み取ることができた。

このような新奇な詞や表現への関心は、第Ⅱ部で取り上げた『千五百番歌合』歌にも見出

せた、また同歌合の判詞から、惟明親王歌のまさにそのような部分が、同時代すでに評価を得ていたことを明らかにした。